

ポスター | 2-03 外科治療遠隔成績

## ポスター

## HLHS、Co/A ( bil. PAB)

座長:竹内 敬昌 (岐阜県総合医療センター)

Thu. Jul 16, 2015 5:20 PM - 5:50 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

I-P-166~I-P-170

所属正式名称: 竹内敬昌(岐阜県総合医療センター 小児心臓外科)

## [I-P-167]動脈管依存性体循環型複雑心奇形に対する一次的修復術と両側肺動脈絞扼後の二次的修復術の比較検討

○寶亀 亮悟, 青木 満, 萩野 生男, 齋藤 友宏, 鈴木 憲治, 秋山 章, 高澤 晃利 (千葉県こども病院 心臓血管外科)

Keywords:高肺血流, 動脈管依存, 両側肺動脈絞扼術

【はじめに】体循環を動脈管に依存した心疾患は新生児期に手術介入を必要とするが、一次的修復が可能な形態であっても手術のリスクを考慮し、両側肺動脈絞扼術を選択される場合もある。今回当院における両側肺動脈絞扼術(B-PAB)の成績を一次的修復術群と比較検討した。【対象と方法】当院で2000年から2014年に形態的に一次的修復術が可能な心室中隔欠損(VSD)のある動脈管依存性体循環の心奇形で、新生児期に手術介入が必要と判断された28例を対象とした。28例中新生児期に一次的に修復術を行った24例(P群)と B-PABを行った4例 ( S群) で後方視的に成績を検討した。VSDに付随した心奇形は大動脈縮窄症(CoA) 9例、CoA+大動脈弁下狭窄(SAS) 3例、大動脈弓離断症(IAA) 4例、IAA+SAS 7例、両大血管右室起始症(DORV)+CoA 1例、DORV+CoA+SAS 2例、総動脈幹遺残症(PTA)+IAA 2例。B-PABを選択した理由は全例で低体重(2000g以下)であった。P群、S群の手術時日齢、手術時体重はそれぞれ $11 \pm 5$  vs  $9 \pm 5$ 日、 $2.8 \pm 0.4$  vs  $1.5 \pm 0.3$  kg、追跡期間は $4.5 \pm 3.8$  vs  $2.2 \pm 1.4$ 年であった。【結果】P群、S群ともに手術死亡はなく、S群は4例が $4.9 \pm 1.0$ ヶ月時、体重 $3.7 \pm 1.1$  kgで根治術に到達した。S群で1例がB-PAB後にLow flowから左室低形成となったため3.4ヶ月時に右肺動脈絞扼解除術を行い、その後根治術に至った。P群では1例が術後8か月目に染色体異常児が自宅で呼吸に関連し突然死した。初回手術後3年でP群、S群の生存率は95.0 vs 100%であった。根治術後の再手術は、P群で3例(内2例はconduit交換で術後4年2か月、5年時)、S群ではB-PABに関連して肺動脈分岐狭窄を来し根治術後3か月で肺動脈形成術を施行した。【考察と結語】両側肺動脈絞扼術後二次的修復は、左室低形成や術後肺動脈分岐狭窄遺残などの問題はあがるが、短期・中期の成績が得られ、低体重、術前状態不良等のHigh Risk症例には良い選択枝と考えられた。